

# 惟喬親王ゆかりの鷹塚山碑 見やすい場所へ 移転などを要望

配水場（枚方市高塚町）にあ



要望書を提出する堀家会長（右端）

平成27年1月16日、堀家会長ら役員が梅崎茂副市長、谷本秀樹水道部長と面談、「鷹塚山碑」に関する枚方市長あての要望書を提出しました。

る石碑です。平安時代の前期、交野が原で遊獵した惟喬親王（2ページからの「惟喬親王と渚院を参照）が死んだ愛鷹をこの地に埋めたという伝承にもとづき、約100年前に建てられたものです。

「鷹塚山碑」の古い写真としては、昭和6年（1931年）に秩父宮親王と同妃殿下が枚方の万里荘（5ページからの「秩父宮雍仁親王と万里荘記念碑」を参照）にご滞在になったとき、枚方の名所を紹介するために撮られた写真の中に残っています。

現在の鷹塚山碑は、配水場

本会としては、渚院を始めとする惟喬親王伝承が多い枚方市の名所のひとつとして、観覧しやすい道路近くに移設するとともに、台座の復元を要望したものです。



現在の鷹塚山碑

の門扉から十数m奥にあり、外からは見にくく、かつてあった碑の台座もありません。



第81号

発行

宿場町枚方を考える会  
会長 堀家 啓男  
072-892-5504

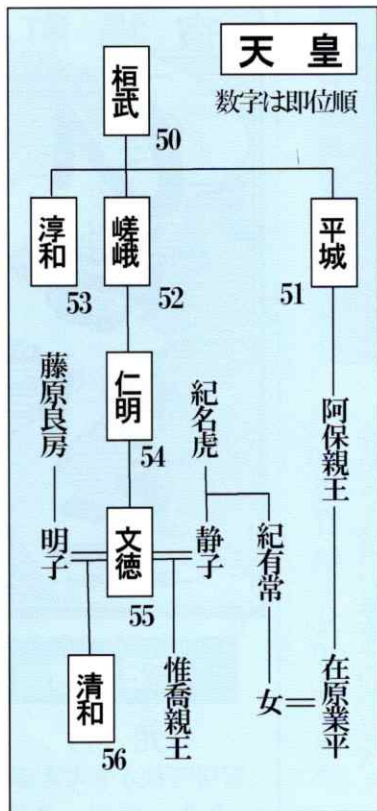
事務局

枚方市出口2丁目6-6  
上野幸夫 072-832-5722

編集 広報委員会

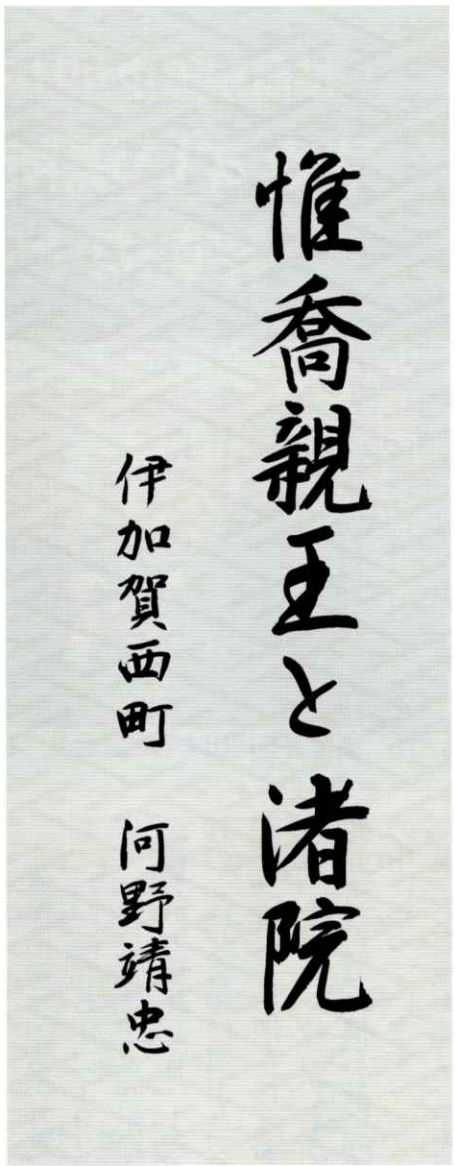
## 主な内容

- 惟喬親王と渚院（2頁～4頁）
- 秩父宮親王と万里荘記念碑（5頁～7頁）
- 散策で伏見の歴史を回想（8頁～11頁）
- 奈良五條の歴史を訪ねる（12頁～15頁）
- 阿弭河荘片仮名申状（16頁～19頁）



惟喬親王（これたかしんのう）は承和11年（844年）、道康親王（みちやすしんのう）と紀名虎の娘・紀静子（きの）

しずこの間に生まれた第一皇子（長男）です。その道康親王が即位して第55代文徳天皇（もんとくてんのう）と



なつたのは嘉祥3年（850年5月31日）、惟喬親王は6歳になっていました。

文徳天皇は静子を深く愛しており、惟喬親王も可愛くて仕方がなかったのです。また惟喬親王は、父である文徳天皇になつき、受け答えから頭脳明晰に見えていました。第一皇子であり、皇位継承の筆頭と思われていました。

道康親王には東宮妃として藤原良房の娘である明子がい

ました。明子は、道康親王が即位して文徳天皇となる直前の嘉祥3年（850年5月10日）、第四皇子・惟仁親王（これひとしんのう）後の第56代清和天皇（を）を生まれました。

藤原良房は皇太子だった桓貞親王（淳和天皇の第二皇子）を廃し、道康親王に文徳天皇となる道筋をつけた人物です。良房は文徳天皇の後継者として、生後8カ月の惟仁親王を皇太子にすることができました。藤原の血筋でなく（両親ともに藤原でなければならぬ）、紀氏が母である惟喬親王に皇位を継承させる訳にはいかなかったのです。

文徳天皇は、惟仁親王が成人するまでの間、惟喬親王に皇位を継承させようとしていましたが、惟喬親王に危険が及ぶとして果たせませんでした。

惟仁親王との皇位継承争い





渚院跡 (後方は市立渚保育所)



標石

に敗れた惟喬親王は、紀名虎の子である紀有常や、有常の娘を妻とする在原業平を供として、交野が原で鷹狩り、作歌、饗宴に憂さを晴らします。交野が原とは、現在の枚方や交野地域一帯の呼び名です。天皇や貴族の狩猟地・遊楽地でした。ここに惟喬親王が設けた別荘が渚院で、その跡地は枚方を代表する史跡の一つとなっています。

桜のはかなさを詠んだ歌ですが、皇位継承から外された惟喬親王の心境を詠ったともいわれています。在原業平の歌を受けて紀有常の詠った歌が、「散ればこそいと、桜はめでたけれうき世になにか久しかるべきです。渚院では近隣の娘さんが多勢集められて、それは賑やか



在原業平の歌碑 (渚院跡)

当時、右馬頭だった在原業平が渚院の桜を見て詠んだ歌が伊勢物語に記されています。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」。

な花見宴会が催されたであろうと想像できます。娘さんたちも、京の華やかなお公家さんたちが多勢やってくるとなれば、先を争って押しかけたのではないのでしょうか。渚院での花見の後、宿泊は水無瀬離宮でした。多勢の家来や身の回りをお世話する女性を従えて、雅な行列で渚院との間を往復したのでしよう。水無瀬離宮の明確な所在地は不明ですが、大阪府三島郡島本町広瀬3丁目にある「水無瀬神宮」が離宮の跡といわれています。この神宮に湧き出る水が「離宮の水」で、環境庁名水百選の一つです。水無瀬のもともとの地名は「水生」で、水が生れるところを意味しています。

現在、渚院がある枚方の御殿山から水無瀬離宮のある島本町広瀬へ行くには、京阪電

2年) 7月に剃髪し、出家し



水無瀬神宮

車、京阪バス、阪急電車を乗り換えて一時間ほどです。当時は、馬で渚院から楠葉の船着場まで行き、馬を乗り捨ててから、舟で淀川を渡り、待たせていた馬で島本の広瀬まで行ったのでしょうか。渚院と離宮は意外と近く、公共交通を何回も乗り換えなければ行けない現在よりも便利だったかも知れません。



て近江国小野に隠棲しました。この時、まだ29歳。寛平9年(897年)逝去、享年54歳。現在、京都市左京区大原上野町に惟喬親王のお墓と伝わる大きな五輪塔があり、宮内庁が管理しています。



惟喬親王の墓

惟喬親王が逝去してから38年、紀貫之が任国の土佐から京へ戻る途中の承平5年(935年)2月、淀川を船で遡っているとき、荒廃した渚院を遠望しています。土佐日記には「かくてふねひきのぼるになぎさの院といふとこ

ろみつづく」と記されています。既述のとおり、惟喬親王の母は紀静子であり、同じ氏族の貫之にとつて感慨もひとしおだったと思われます。さらに時代を下つた江戸時代、荒れ果てた渚院跡地に真言宗の観音寺が創建されました。この観音寺も明治3年(1870年)、廃仏毀釈により廃寺となりました。現在、跡地には鐘楼と梵鐘だけが残っており、平成8年に枚方市の指定文化財に登録されています。



観音寺の鐘楼と梵鐘

梵鐘は寛政8年(1796年)、現在の枚方上之町で河内国物官鑄物師として代々鑄物業を営んでいた田中家が鑄造したものです。田中家の梵鐘のうち、唯一枚方に残っているものです。



観音寺梵鐘

江戸時代の初期、この地域を治めていたのは永井伊賀守尚庸(ながいいがのかみなおつね)でした。渚院の近くに来たとき、荒れ果てた様子を嘆き、院の修理改修、桜の植樹などを行い、惟喬親王や在原業平が過ごした風雅を再興しました。寛文元年(1661年)、家臣の杉井吉道は主の

功績を称えながら、渚の土地の良さ、平安貴族の詩歌の結実などを記した顕彰碑を建てました。顕彰碑は現在も渚院跡に残っていますが、風雨による劣化のため碑文を読むことができません。幸いにも判読できた時代の拓本などから平成14年12月、枚方市教育委員会と渚院を考える会が翻刻碑を建てました。



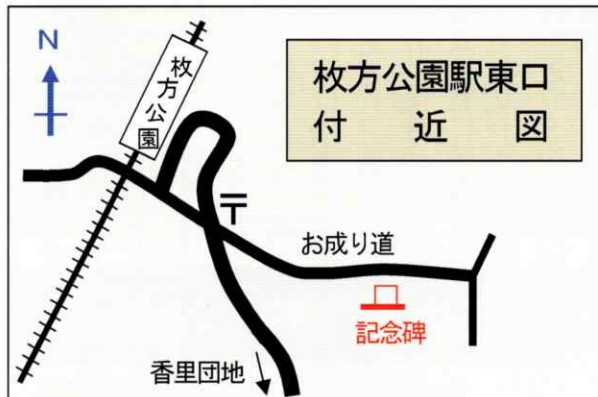
翻刻碑



顕彰碑



# 秩父宮雍仁親王と 万里荘記念碑



枚方公園駅東口側に枚方公園駅前郵便局があります。その前の道路は、昔から地域に住んでいる方から「お成り道」と呼ばれていました。

「お成り道」を100m余り上がった右手にコインパーキングがあり、その奥に大きな記念碑があります。

記念碑の後方一帯はマン

ションが建ち並んでいます。かつては万里荘という数奇屋風の大きなお屋敷がありました。

記念碑は、昭和6年（1931年）に秩父宮雍仁親王（ちちぶのみや・やすひとしんのう）と勢津子（せつこ）妃殿下が万里荘に滞在された記念に建てられたものです。ご滞

在のため、大阪府と枚方町は遺漏のないよう準備を整えました。そのひとつとして、枚方町は万里荘前の道路を拡幅し、沿道には植樹も行いました。記念碑前の道路を「お成り道」と称したのはそうした所縁によるものです。

秩父宮雍仁親王は大正天皇と貞明皇后との第二皇子です。昭和天皇の弟君、今上天皇の叔父にあたります。

勢津子妃殿下は旧会津藩主・松平容保の六男だった外交官・松平恆雄の長女です。旧名は松平節子でしたが、雍仁親王の実母である貞明皇后の名・節子（さだこ）との同字を避け、皇室ゆかりの伊勢と松平ゆかりの会津から一字ずつを取り、同音異字の勢津子に改められたものです。

昭和6年（1931年）8月、秩父宮雍仁親王は陸軍大

学校学生の資格で、高槻にあった第四師団工兵第四大隊に入隊、妃殿下とともに北河内郡枚方町伊加賀北町にある田中太介氏の別邸・万里荘に1カ月間滞在されました。両殿下が到着された同年7月31日には、これを祝して午後8時から枚方町主催の奉迎提灯行列が行われました。

秩父宮殿下が高槻工兵隊に通うかたわら、ご夫妻で継体天皇陵や石清水八幡宮を参拝され、郡内の児童・青年団の作品展を参観されました。

ご滞在最後の夜となった8月29日には奉送の盆踊りが行われ、また枚方小学校に集まった町民2千人らは、町助役を先頭に提灯行列を行いました。

ご滞在中、呼人堂は銘菓「あかつき」を献上し、たいそう喜ばれたそうです。

秩父宮親王および勢津子妃

殿下が滞在された万里荘は、車両メーカー・田中車輛工業の創業者、田中太介氏の別邸でした。田中太介氏は大正9年(1902年)、尼崎で鉄工所を経営、田中車輛工場とし、戦時中は陸海軍の軍需工場に指定され、戦後の昭和20年10月、全株式を近畿日本鉄道株式会社に譲渡しました。車両メーカーとしての田中車輛は、近鉄グループの近畿車輛が引き継いでいます。

田中太介氏は、枚方丘陵につながる伊加賀田中山の六千坪の敷地に、建坪が四百坪に及ぶ数奇屋風の別邸を建築、日本間が25室、洋間が3室もある広大なお屋敷でした。昭和9年(1934年)には、本宅の山側に木造平屋建て、銅板葺きの24坪ほどの茶室と四阿(あずまや)が建てら

れました。これはもともと行在所(天皇が行幸するとき、旅先に設けた仮宮)として建てられたものでした。

建築は、天才的な数奇屋建築の棟梁といわれた平田雅哉です。建築材料も最高の素材を使用、柱は北山杉の柂目で、壁の中には真竹を通常の2倍薄壁は7回も塗り重ねられたそうです。平田はこの時の様子を自著の「新版大工一代」に記しています。

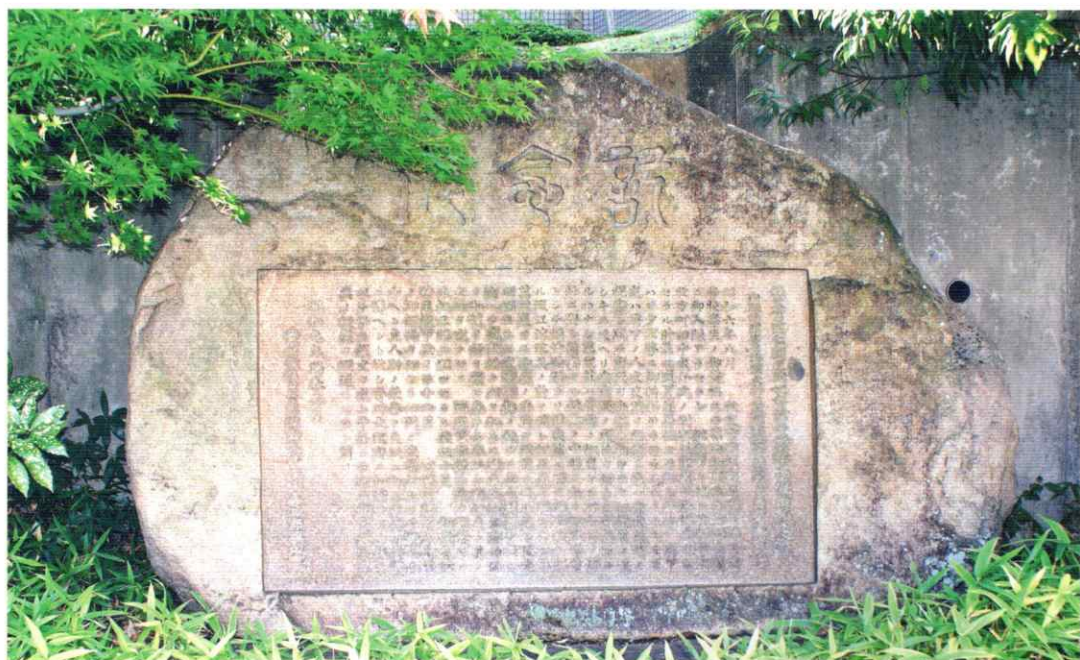
お茶室と四阿は平成4年(1992年)に広島県呉市の池ノ浦公園内に移設、「松籟亭(しょうらいてい)」と名づけられました。呉市下蒲刈町の三之瀬バス停から西へ2kmほど行つたところにあります。広島・浅野藩のおかかえの茶匠であった、上田宗箇流の家元によって席開きが執り行われました。この席開きの際、

元の持ち主だった田中さんの先代の奥さんにも出席していただいたところ、大変お喜びになったということです。

なお、「松籟亭」は平成9年(1997年)に国の登録有形文化財に指定されています。冒頭の記念碑、秩父宮雍仁親王と勢津子妃殿下が万里荘に滞在されたときの記念碑は、昭和9年3月に建てられたものです。

銘文(石などに記された文)は第30代内閣総理大臣の齋藤實(一・二六事件で射殺、頌述(功德などを褒め述べる)が貴族院議員柴田善三郎という万里荘に相応しい人物です。ただ、設置から80年以上経過し、劣化が進んで判読できない文字もあります。この部分を推定で判読(文責、堀家啓男・上谷勝己)したのが次ページの碑文です。





## 万里荘記念碑の碑文

編集の都合上、1行の文字数は記念碑と異なります。青色文字は推定文字。

## 記念碑

秩父宮雍仁親王同妃勢津子両殿下御假泊記念碑記  
内閣総理大臣海軍大将正二位勲一等功二級子爵齋藤實是頌

昭和六年八月秩父宮雍仁親王殿下陸軍大学校学生ノ御資格ニテ第四師団工兵第四大隊ニ御入隊アラセラレ妃殿下ト俱ニ北河内郡枚方町田中太介氏ノ別邸万里荘ニ御假泊アラセラル時正ニ盛夏炎暑ノ熾クガ如シ然モ殿下ハ日夕軍務ニ御精勵アラセラルノミナラズ或ハ府下ノ人文史蹟ヲ探訪シ或ハ産業民情ヲ視察シ以テ府民ヲ勤奨シ給フコト一箇月ノ久シキニ及ベリ衆庶歎ノ感徳ヲ仰キテ感泣セサルナシ万里荘ハ青雲ノ棚曳ケル伊加賀ノ祠址ニ対シ蒼鬱タル林密ノ中腹ニ在リ松影參差トシテ緑竹倚倚タリ清泉庭ニ湧キ健鯉池ニ躍ル澱江溶溶其ノ麓ヲ流シ郷邑遠ク開ケテ一望萬里遙力ニ近畿ノ秀麗ヲ徵茫ニ見ル真ニ風光明媚ニシテ史實深趣ノ地ナリ主人翠華ヲ前ニ迎ヘテ感激惜ク所ヲ知ラズ齋戒沐浴日夜神仏ノ加護ヲ祈リ家ヲ挙ゲテ奉仕シ誠炯克ク大任ヲ完クセリ両殿下亦持テ其ノ經營セル車両工場ニ臨マセラル後秋十月朝香宮鳩彦王殿下次イテ十一月賀陽宮恒憲王殿下ノ御假泊ヲ仰ケリ一門ノ光榮何モノカ旃レニ加ヘシ加ヘテ主人斯ノ榮譽ヲ子々孫々ニ傳ヘント欲シ当時大阪府知事タリシ故ヲ以テ予ニ撰文ヲ求ム予喜ンデ之ヲ諾シ謹ミテ其ノ梗概ヲ頌述スルコト爾リ

昭和九年陽春三月

貴族院議員正一位勲二等 永田善三郎撰文



# 近郊を歩く会

## 散策で伏見の歴史を回想

三栗 石川 勲



残暑が残る昨年の9月26日、「近郊を歩く会」と題して伏見宿を散策しました。伏見宿は、東海道54番目の宿場町ですが、同時に淀川水運の中継地で、内陸港として栄えていました。

「近郊を歩く会」シリーズは現地集合・現地解散が原則です。今回は午前9時30分に京阪中書島駅の北口に34人

が集合しました。改札を出たところに、周辺観光案内図のある広場があり、本日の案内人でもある上谷副会長から散策コースの簡単な説明がありました。

まず、広場の道標に「是一丁」と刻まれた長建寺に向かいました。



### 長建寺

長建寺は真言宗醍醐派の寺院です。江戸時代の元禄12年(1699年)、伏見奉行の建部内匠頭政宇(たつべたくみのかみまさのき)が中書島の開拓にあたり、深草大亀谷即成就院の塔頭多聞院を移設し

て創建しました。寺名は建部氏の長寿を願って付けられたもので、ご本尊は八臂弁財天、音楽をもつて衆生を救う女神で、福德・智慧、財宝をもたらす七福神のひとつです。地元では島(中書島)の弁天さんとして親しまれています。



長建寺

このお寺の特徴は中国風の童宮門と朱色の壁です。これは遊郭の遊女が技芸上達の神として八臂弁財天を信仰していた名残だといわれています。



手水舎の水は關伽水（あかすい）といって、弁天様にお供えする水で、功德水であり、参拝者の清めの水となっています。

### 十石舟

次に長建寺の前を流れる濠川（ほりかわ）で十石舟に乗りました。

濠川は豊臣秀吉が伏見城の築城に伴い、資材運搬のために掘ったのが始まりで、外堀ともなっていました。江戸時代になると、問屋、宿屋、酒蔵が建てられ、米、薪炭、酒、そして旅客を運ぶ輸送船として十石舟、三十石船が往来し、明治末期まで運航されていました。

現在の十石舟は屋形船仕様の遊覧船で、定員は15人です。長建寺前の乗船場（月桂冠大倉記念館裏乗船場）といわれ

ている）から三栖閘門まで往復する航路で、のんびりと緑の川辺と酒蔵を眺めることができます。



十石舟「千姫」

正味の乗船時間は往復約1時間ですが、三栖閘門（みすのこうもん）で下船し、資料館を見学してから次の舟に乗るともう少しかかります。私も、往路は「秀吉」、帰路は「千姫」に乗船しました。乗船料は大人千円、子ども（小学生以下）は半額です。

なお、十石舟の運行期間、出航時間など、詳しくは京都伏見観光連携協議会のホームページを参照してください。

### 三栖閘門

三栖閘門は、宇治川と濠川の異なる水位を調整し、船を連続して通す施設で、昭和4年（1929年）に完成しました。現在は道路・鉄道などの交通機関の発展より、交通路としては利用されていませんが、歴史的な施設です。



宇治川側のゲート

三栖閘門資料館は十石舟の船着場の上にあります。昔の操作室を復元した建物で、伏見の歴史から閘門の役割まで模型などで展示しています。私たちは十石舟で行きましたが、中書島駅から徒歩10分で行けます。



三栖閘門資料館

### 寺田屋

寺田屋では幕末にふたつの大きな事件がありました。薩摩藩士肅清事件と坂本龍馬襲



撃事件です。

薩摩藩士肅清事件とは、文久2年(1862年)に起こった、薩摩藩の急進尊王派と島津久光が派遣した鎮撫使との間で激しい斬り合いとなった事件です。



坂本龍馬襲撃事件は慶応2年(1866年)、宿泊していた坂本龍馬が伏見奉行の捕り方に襲われ、応戦するも負傷し、からも脱出した事件です。このとき入浴中だったお龍(おりょう)さんが捕り方

に気付き、龍馬に急を報せた話は有名です。よく、風呂から出て、裸のまま駆けつけたといわれていますが、実際は濡れたまま、袴一枚を羽織っていたようです。

寺田屋の入口には「坂本龍馬先生」と記された銅像があり、屋内の各所にも龍馬の写真やゆかりの品々が展示されています。



正面が龍馬の部屋

弾痕や刀傷の貼紙もあり、さながら坂本龍馬資料館です

が、現在も宿泊することができません。ただし、龍馬が泊まった寺田屋は、鳥羽伏見の戦いで消失しており、当時の建物の西隣に建てられたものです。

### 月の蔵人

昼食は「月の蔵人」でいただきます。大正2年(1913年)に建築された月桂冠の酒蔵を改装した店です。



私たちが入った時間は昼食時間帯でしたが、平日という

のに130以上もあるテーブル席はほぼ満員でした。

### 伏見夢百衆

昼食後は伏見夢百衆(ふしみゆめひやくしゅう)に寄りました。

### 伏見夢百衆



大正時代に建築された月桂冠の旧本店を改装したおみやげ処として伏見の清酒多数や伏見名物を販売しています。

喫茶コーナーでは、酒の仕





月桂冠大倉記念館の入口

最後は月桂冠大倉記念館を見学しました。  
酒造会社の月桂冠株式会社による、伏見の酒造りと日本酒の歴史をテーマとする資料館です。明治 42 年（1909 年）に建てられた酒蔵を改装して、昭和 57 年（1982 年）に開館（記念館のパンフに記載）しました。

### 月桂冠大倉記念館

込み水を使ったコーヒー・紅茶を飲むことができます。

見学ルートは酒造りの工程順に沿っており、最後の方にはお楽しみみの試飲コーナー「きき酒処」があります。もちろん試飲は「冷酒」です。売店もあり、参加者の皆さんは、利酒したお酒を買っておられました。私はお酒にちなんで、酒粕で漬けた「奈良漬」を買いました。  
中庭に出る手前に井戸があり、湧き出る水は「さかみず」と呼ばれ、酒造りにとっては命の水です。  
この井戸は昭和 36 年（1961 年）に掘り直された井戸で、地下 50 m の水は鉄分が少なく、まろやかできめ細かな酒を生み出す源であり、隣接する酒蔵で使用されています。  
小さな湯飲み茶碗がおり、利酒ができない下戸の皆さんも「おいしい」と飲まれていました。



月桂冠大倉記念館での記念写真



# 古代から近世まで

## 奈良五條の歴史を訪ねる

### 船橋本町 上谷 勝己

平成26年度第2回バス見学会は初冬の12月9日、奈良

県五條市を訪ねました。42名の参加者に乗せたバスは午前8時30分に枚方を出発、10時前に最初の目的地、市立五條文化博物館に到着しました。

#### 市立五條文化博物館

設計は世界的に有名な独学の建築家・安藤忠雄氏です。上から見るとパウムクーヘン

に見えることから五條クーヘンと呼ばれています。

文化博物館の外観



五條の歴史と文化を紹介する博物館で、縄文・弥生・古

墳・古代・中世・近世・近代・現代の各時代にタイムスリップできました。藤原南家ゆかりの古刹である栄山寺、紀州街道沿いの古い街並みが残る五條新町（重要伝統的建造物群保存地区）、明治維新発祥の地・天誅組の変（後述）の本陣桜井寺など、学芸員さんから今日の見学予定地を説明していただきました。

隣接する「5万人の森公園」

の「奈良五條・自然と柿の里・ファーム」では、野菜・果物など、参加の皆さんが地元物産の面白い物に大変熱心なのは驚きました。

#### 栄山寺

次に真言宗豊山派寺院の栄山寺（史跡指定）を訪ねました。栄山寺は養老3年（719年）に藤原南家初代武智麻呂（藤原鎌足の孫）が開創しました。

ご本尊は永享3年（1431年）造立の薬師如来坐像（重要文化財）です。木造漆箔の寄木造りで本堂に安置されていますが、秘仏ということで特別開扉の時期しか拝観できません。（特別開扉は例年、年始と、春・秋の3回です）ご本尊の横には脇侍として日光・月光の両菩薩、その前には薬師如来を守護する十二



神将（重要文化財）が控えています。

本堂の前には弘安 7 年（1284 年）の銘がある重要文化財の石灯籠があり、さらに近くには奈良時代建立の七重石塔婆があり、これも重要文化財です。



本堂と石灯籠

境内の奥の方に国宝の八角円堂があります。藤原南家仲麻呂が父母追善供養のため天

平宝字年間（757 年～765 年）に建立しました。八角円堂内陣装飾画（重要文化財）は天平時代を代表する唯一のものです。



栄山寺にはもう一つ国宝があります。青銅製の梵鐘です。菅原道真の撰、小野道風の書と伝えられる陽鑄の銘文、また延喜 17 年（917 年）11 月 3 日と鑄成の銘文があります。

京都神護寺、宇治平等院の鐘とともに平安三絶の鐘とされています。



栄山寺梵鐘

### 撫石庵

栄山寺を後にすると、その 300 メートル西にある吉野川沿いの和風レストランに向かいました。

吉野川は音無川ともいわれ、大台ヶ原に源を発し、栄山寺から上流 25 km が県立吉野川津風呂自然公園に指定されています。風光明媚な自然公園の一角に佇む「撫石庵」で少

し慌ただしい和食の昼食、栄山寺弁当をいただきました。

撫石庵



### 五條代官所長屋門

昼食後は五條代官所長屋門に行きました。半数は現地のボランティアガイドの案内で新町通りの散策に出発し、残りはそのまま長屋門に留まり、現地での語り部でありボランティアガイドでもある北谷美和子さんから天誅組の変につ



いての熱弁を拝聴しました。散策では五條新町や五新鉄道路跡、桜井寺などを案内していただきました。

### 五條新町

五條新町が生まれたのは今から約400年前、関ヶ原の戦いの後、江戸幕府が成立した頃にさかのぼります。慶長13年(1608年)に城づくりや町づくりに秀でた松倉重政が城下町としての街並みを建設しました。

大和二見城主だった松倉重政は城下町の振興策として、93軒の町屋を取り立て、その諸役を免許したことで、商人の町として繁栄させました。石高は一万石でしたが、大坂夏の陣に関連した武功により、元和2年(1616年)には四万三千石に加増されて島原に移封されました。

その後、大和二見城は廃しされ、五條新町は幕府の天領となりました。この頃の五條新町は紀州街道の宿場町としての性格を強めていきます。



五條新町の町並み

### 五新鉄道

五新鉄道は幻の鉄道と呼ばれています。明治時代に計画され、昭和12年から着工されました。五條市から新宮市までを結ぶ「五新鉄道」となる予定だったのですが、太平洋戦争のため中断されたままになっています。



吉野川

五新鉄道跡

吉野川堤防上では吉野川の舟運についてガイドしていたのですが、枚方宿と淀川の舟運が地理的に類似していたことに驚きました。

### 桜井寺

桜井寺は天暦年間(947年〜957年) 桜井康成の創建と伝えられる古刹で、天誅組はここを本陣として五條仮政府と号しました。いわゆる

天誅組(天忠組)の変です。五條が明治維新発祥の地といわれる由縁です。



桜井寺山門

武力を背景に、ペリーが開国を要求してきた幕末、開国が攘夷か、佐幕か尊王か、混乱の中、志士たちは幕府を倒し、新しい世の中をつくることに命をかけていました。故郷を捨て家族を捨て、脱藩してきた志士たちは桜井門外の変、長州藩による外国船砲撃、寺田屋事件などを経て、文久3



しかし、翌日に届いたのは行幸中止の知らせでした。反対派の公家、薩摩藩、会津藩などが8月18日に宮中クーデターを断行し、行幸の中止、朝廷内の人事変更などを決定したのです。わずか1日で天誅組は皇軍御先峰の大義名分を失い、朝廷・幕府から逆賊として討伐を受ける側に立た

年(1863年)いよいよ討幕への第一歩が踏み出されようとなりました。それが大和行幸であり、天誅組でした。大和行幸に呼応するため、皇軍御先峰として公家中山忠光、土佐脱藩吉村寅太郎、備前脱藩藤本鉄石ら50人が8月17日に五條代官所へ討ち入りました。そして約七万石の幕府領を朝廷直轄地とし新しい政治機関「五條御政府」を打ち立てました。これが天誅組です。

枚方への帰路、柿の葉ずしヤマト五條本店に寄りました。夕食の買い物でしょうか、レジには長蛇の列ができていました。秋(初冬)のバスツアーも皆様のご協力で、多数参加していただき、好天に恵まれ、ほぼ予定通り、午後5時半頃、全員無事に枚方に帰り着きました。



五條代官の首を洗った石手水鉢

されたのです。中山忠光は19歳、明治天皇の伯父、孝明天皇の典侍・明治天皇の生母(中山慶子)の実弟でした。



五條代官所長屋門前で記念撮影



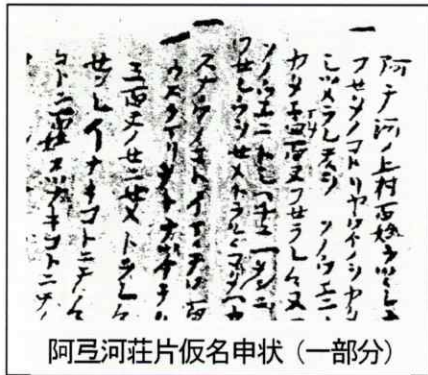
あてがわのしょう かたかなもうしじょう

# 阿豆河荘片仮名申状に見える中世前期の農村と人々

香里園桜木町 鳥井敏宏

## はじめに

1月の講演会では、阿豆河荘片仮名申状の原文、第1条と第4条を読みました。この片仮名申状から、農民たちが二重支配に苦しみながらも、自分たちへの不当に対し、逃散（耕作を放棄して逃げる）を抵抗手段として、粘り強く戦い、訴えるまでに成長してきたことを述べました。



阿豆河荘片仮名申状（一部分）

今回は、農民たちが力を蓄えた背景を見ていきたいと思えます。その前に、申状の舞

台である阿豆河荘と訴えの内容を振り返ってみます。

## 阿豆河荘と申状の内容

### 申状の舞台・阿豆河荘

現在の和歌山県有田川町（旧清水町）付近にあった中世の荘園です。

領主本家円満院は名門寺院であり、当初本家であった寂楽寺は、本家に次ぐ領家の地位にありました。

高野山から南下する有田川や、その支流が深いV字谷を刻み、蛇行しながら流れています。四方を800〜1000m以上の山々に囲まれ、谷底の平地と山腹の斜面などに散在する集落、旧清水町域がほぼ中世の阿豆河荘の荘域です。年貢は米ではなく、材木、絹綿、布、糸でした。雑公事

は、炭、紙で、銭納の場合が多く、熊野参詣の世話をする仕丁役（力仕事）、兵士役などの夫役も勤めました。

阿豆河荘の地頭、湯浅宗親はもともと湯浅荘（現和歌山県湯浅町）を本拠地とした豪族の出身です。農民に対して激しい収奪を行い、逃亡した農民の土地を取り込み、自分の領地にするなど、強引な領主権の拡張を図っていました。そのため領家寂楽寺との相論（訴訟）も起こり、当時の同荘は、領家、地頭、農民との三つ巴による紛争の場でもありました。

### 百姓片仮名申状

鎌倉時代の後期、建治元年（1275年）10月28日、

紀伊国阿豆河荘上村百姓らは、地頭の非法十三カ条をしたため、荘園領主（寂楽寺）に訴



えました。もし、この告発がいれられなければ、百姓たちは集団で村を棄てる(逃散)と通告する必死の行動でした。

この申状は、一部の漢字を除き全文のほとんどが片仮名文字で書かれています。この頃の訴訟文書の多くは、定められた様式による漢文なので、片仮名文は珍しいものです。

申状に書かれている地頭の非法は、「違法所務(定められた以外の仕事)」「新儀の賦課(地頭が勝手に決めた負担)」「不当検断権(警察・裁判権の発動)」などです。

訴えを要約すると、「稲刈りや収穫した時期をねらって、武装した大勢の荒使いを派遣して、強引に年貢・公事を責め取るほか、先例のない多くの負担を強制している。これらの非法を止められなければ、去年の秋、今年の春に続いて

また逃散せざるを得ません」というものです。この訴えは受け入れられたのでしょうか。

### 訴訟の行くへと 農民の抵抗を支えたもの

#### 漢字申状と農民の抵抗

農民たちは、この片仮名申状のほぼ半年前の5月、湯浅氏の非法を三カ条にまとめ六波羅に訴えています。全文漢字で書かれ、片仮名申状とは全く異質に感じます。

また前年の11月、地頭の非法に対して、本家への材木納入の山出しや、川下しなどの役を拒否して逃散しています。

3月にも逃散するとともに、代表者を円満院に送り、地頭の非法を訴えていました。

円満院は、地頭に「直ちに非法を停止し、勧農の沙汰を

せよ」と厳しく命令する一方、農民たちには何かあれば申し出るように言い聞かせ、村へ帰って農業に励むようにと申し付けました。農民たちは帰りましたが、「地頭の非法はなお止まないで申し上げる」と、5月申状の前文に書いています。

この後、訴えに対する報復なのか、地頭は6月に上村百姓28人を捕縛、さらに牛馬8頭を押収しました。そのため本家は7〜8月頃に地頭を預所職から解任しています。だが、その後も申状にある地頭の非法が続いたため、片仮名申状を差し出したのです。

#### 農民の抵抗を支えたもの

##### 強い連帯と団結力(一味神水)

預所を解任された地頭は、領家との激しい相論を展開します。自分たちの既得権益を

守り、さらに支配を広げるために必死だったのでしょう。武力をもつて厳しく取り立て、「新儀の賦課」を次々と課けてくる様子が目に浮かびます。農民たちにとつても、自分たちの要求を訴え状にしたため、しぶとく逃散と還任(村へ帰る)を繰り返すことは、運動であり、戦いでした。

この粘り強さの背後にあるのは強力な団結力です。「百姓らは、一味となって神水を呑んで盟約し、地頭の課役を拒否している」という地頭側の記録があります。これは、当時農民たちが村の神社の祠の前で誓う「一味神水」「一味同心」といわれたもので、各地で始まった百姓による一揆の形成が当荘でもあったことを語っています。

#### 経済的基盤

村の団結と連帯とともに、



激しい抵抗を支えるものとして、経済的な基盤が考えられます。申状の時点でも、当荘ではかなりの貨幣を所持、流通させていたと思われます。

当時の農村では、天候不順、飢饉疫病と戦いながら、二毛作を始め、肥料、牛馬糞、農具の発達などにより、農業の生産性が向上し、余剰が生まれてきます。

貨幣の流通は、余剰生産物の交換の場である市の形成と発達を物語っています。申状の少し前の正嘉2年(1258年)、阿豆河荘の農民が市で綿の相場を尋ねている記録(紀伊国阿豆河荘綿送文)が残っており、この頃には農民も市で取引していたようです。この訴訟の結果は明らかではないのですが、当時全国的(特に西国)荘園・公領における地頭の非法は激しく、幕

府が制止したにもかかわらず、非法は増えるばかりでした。

建治元年から35年たった延慶2年(1309年)、本家円満院に代わり高野山が阿豆河荘を支配しました。高野山は、同荘の農民に四カ条の命令を出します。百姓の在家や田畠の相続や質入れ、逃亡跡の買い取りなどの時に、公事・夫役・御綿を勤めないことへの厳しい禁令でした。農民が勤めないことを「阿豆河荘の習い」だとする主張や、「いかなる諸荘園にもこのよ

うなことはない。返す返す不思議なことだ」という高野山預所の怒りから推察すると、当荘の農民たちが特権として獲得していたものは大きかったようです。また、逃亡農地を買い取るほどの有力百姓の存在もみられ、建治元年当時

も、山奥の山村である当荘の上村には、それなりの財力があつたものと思われます。寄合とコミニケーション網  
片仮名申状の文は、5月の漢字申状と比較すると、低レベルの文章です。ある研究者は、十三カ条の配列構成や文脈などを検討して、「訴訟という観点からこの申状を見ると文章力とかわりなく、百姓らの力量が意外といえるほど高い」と評価し、要約すると次のように指摘しています。

### 十三カ条の配列順序

百姓らが最も訴えたいのは新儀の賦課や供給の強制、自分たちの生命や安堵にかかわることです。しかし、最初と最後に本家円満院の権利を記しています。年貢関連も基本的年貢である絹を最初にあげています。本家領家に関わることを最初に配列して、訴状を受け取る領家に配慮しながら地頭の年貢徴収が違法であり、領家の所務権侵害を示唆したのです。

### 反論する力(巧みな自己主張と自己正当化)

年貢の材木納入の遅れに対する弁明の簡条では、遅れの責任はすべて地頭にあると、自らを正当化しています。このような巧みな自己主張と自己正当化は、農民たちが訴訟時に反論する力を身に付けてきたことを示すものです。当時、各地の農村で出された百姓申状からも明らかです。

別の研究者は、その背景について、「阿豆河荘の農民は京上夫(地頭の京都出張に人夫として使われる)として京への行き帰り、滞在中に様々な情報を得たと思われる。また、鋳物師や商人、馬借などの交通運輸業者など、自由に各地を移動できる民衆との交流、



市での出会い、やり取りからも情報を得ていた」と考えられると述べています。このような情報網の形成が農民たちの成長に寄与したはずです。

### 寄合による団結

自分たちが得た情報を集め、問題を話し合い、態度を決める場が「寄合」でした。阿豆河荘でも寄合により、訴訟、逃散などが話し合われ、「一味神水」も行われたようです。片仮名申状より以前の寛元元年（1243年）若狭国太良荘でも、農民たちが地頭代の非法を訴え、罷免を勝ち取りました。このとき、地頭の側は、「百姓は一味同心であり、その結束は簡単に破れないものだ」といっています。

## 平成の阿豆河荘

紀伊の国の山奥深い谷間から、急に開ける美しい風景に

出会いました。そこは、片仮名申状の時代から後の近世に開拓された「あらぎ島」という棚田です。

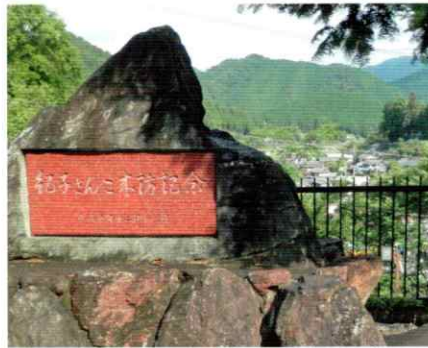


「あらぎ島」の棚田

現在の清水地区は、湧き出した温泉を活用した宿泊施設、中世以来の特産品である和紙や木工品の販売、紙すきや藁製品づくりの体験など、郷土の歴史を大切にしたい「町おこし」に努めています。

同町は、秋篠宮妃紀子さまの曾祖父の出身地です。そのことも町の人たちには誇りで

あり、町営バスの運転手さんの話からもうかがえました。毎年9月6日に「あらぎ島」の棚田を1700本のろうそく竹灯籠でライトアップして、秋篠宮悠仁さまの誕生日を祝っています。



「紀子さんご来訪記念」碑

最初に片仮名申状と出会ったときは、たどたどしい片仮名文字で、地頭の非法による苦しみを生々しく書いており、高校の教科書にも記載されている「ミミヨキリ、ハナヲソグ」というような身に迫る庄

迫を受けながら、農民がやむを得ず立ち上がったことに心を打たれました。しかし、現地を訪れ、いろんな書物を読み、漢字申状と仮名申状の原文を読み返して見ると、農民たちのイメージが変りました。

農民たちには、一歩も退かないといった気迫とともに、地頭に負けないしぶとさ、粘り強さがありました。また、領主と地頭との争いの隙間をうまくつき、反論する力を身につけたことを示す申状から、私の想像をはるかに超える、中世農民たちの情報収集能力の高さ、生き抜くためのしたたかさを感じます。それらは、「古代の律令体制」と「近世の幕藩体制」の間という時代にあつて、自分たちの厳しい掟を持ち、下剋上という社会的風潮の中に生きた農民の特有の姿でもありました。



宿場町枚方を考える会 結成30周年記念事業(予定)

宿場町枚方を考える会は、平成27年度に結成30周年を迎えます。この記念事業について検討していますが、現在の時点で予定されている事業をお知らせします。

1. 記念式典および記念講演会

日時 平成27年11月15日(日)

午後1時30分 開会

場所 メセナひらかた多目的ホール

講演 演題と講師は未定

2. 枚方の歴史入門講座

内容 本会会員を講師する座学と当該史跡の見学

午前10時から座学、午後1時30分から見学

費用 1講座500円、交通費、昼食は自己負担

会場 未定(施設の予約時期に達していないため)

日程 6月16日(火) 記紀に見る茨田堤築造など

7月21日(火) 枚方での行基の活躍

8月18日(火) 桓武天皇と郊祀壇

9月29日(火) 蓮如上人と出口光善寺

10月20日(火) 枚方宿の設置と二十石船

(注) 記念事業の詳細は未定です。会員の皆さんには個々の事業案内をお送りします。

新入会員紹介

(平成27年3月1日現在)

青木	利典さん	城東区鴨野西
上村	恵子さん	北楠葉町
戸倉	文子さん	池之宮
山中	昭男さん	北中振
山根	國宏さん	西船橋
奥村	均さん	香里ヶ丘
山北	清昭さん	楠葉野田
安里	貞男さん	星丘
石田	房恵さん	北楠葉町
野口	敏男さん	山之上東町
森野	なおみさん	伊加賀寿町
河井	裕一さん	牧野本町
鷺沢	徹志さん	楠葉面取町

会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会、会誌(本誌)を発行しています。会費は月300円です。入会をお待ちしています。ご希望の方は村次信子まで。電話072(891)6162。